

(1) 施設計画及びコスト削減の考え方についての提案

子どもや保護者、地域住民が参画する『みんなの学校』を関係者と共に創ります。また、敷地のポテンシャルを最大限活用し『自然と共に生きる・学ぶ』学校づくりを目指します。

■地域と、自然と、みんなとふれあえる学校

- ・ 工事中の仮設グラウンドは竣工後にサブグラウンド (バンブー広場) となり、竹林と学習の庭の自然を感じられる遊び・学びの場となります。
・ 内装の一部に『竹』を採用し、学校の特徴である竹林を身近に感じられる設えとします。
・ 1階のPC教室と図書室はメディアセンターとして一体的に活用し、勝田小の独自性を把握して児童や教員等運営側の意見を取り入れながら中庭を含めた開放感のある学校図書館づくりを提案します。
・ コミュニティハウスから中庭へのアクセスがしやすく、学校と地域が交わる野外活動の場として活用します。

■子供たちがのびのびと学べる、シンプルで使いやすい学校

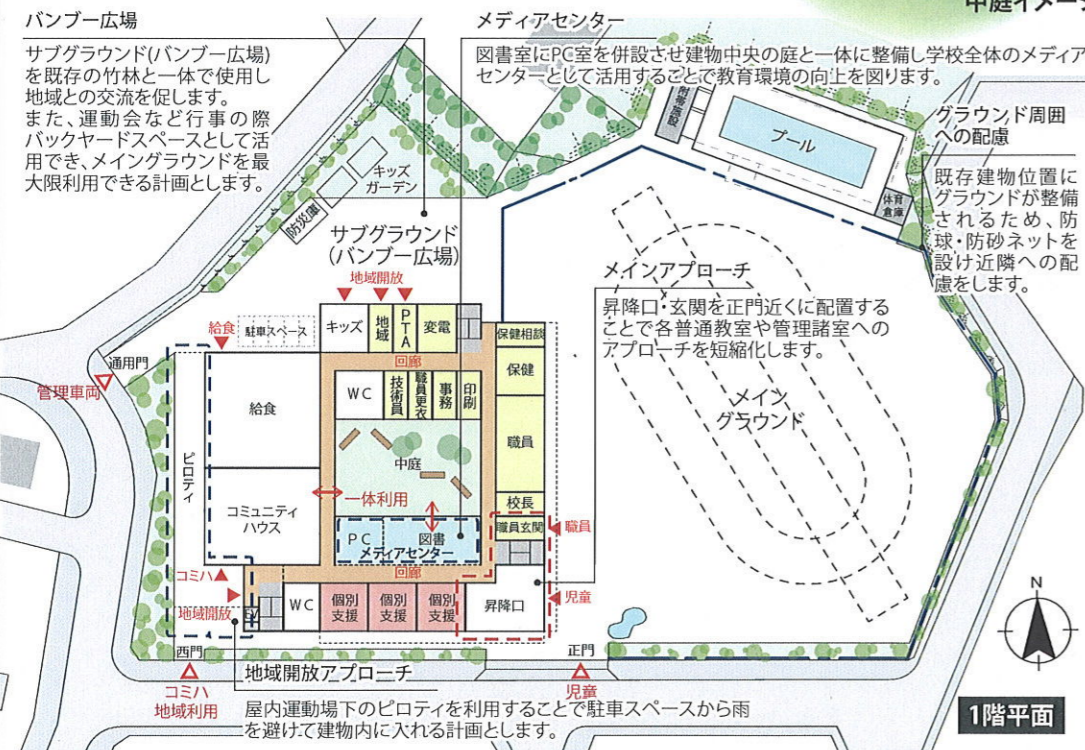
- ・ 明快なゾーニングと、中庭を中心とした行き止まりのない回廊により、効率的な校舎内の移動を可能にします。
・ 普通教室、特別教室、多目的室の中心にあるワークスペースでは総合的な学習の時間や習熟度別学習、特別教室授業での発表や作品の展示など様々な学習活動で利用します。
・ 普通教室とワークスペースは、可動間仕切り・可動家具によって、クラス数や学習システムの変化、機能転換に柔軟に対応できる自由度の高い空間構成とします。

■コスト削減に向けて

- ・ 体育場の立体化 (2階) で基本構想案に比べて本計画の建築面積が約20%少ないため基礎構造や残土量の削減が可能。
・ 新設校舎は、既存施設の先行解体 (運動場、倉庫等) が必要のない配置で計画している為、工期負担の軽減となります。
・ 屋外の倉庫、防災備蓄庫などの再利用を検討し、コスト削減に努めます。

■自然エネルギーから環境を考える

- ・ 自然エネルギーを建築物に取り入れることで様々な環境教育を児童に伝えられるようにします。
・ 太陽光発電によるLED照明への活用
・ 階段室を利用した自然換気 (ソーラークムニー)
・ 中庭による採光・中間期の換気利用
・ 運動場の建物西面を遮光ルーバー等を設置

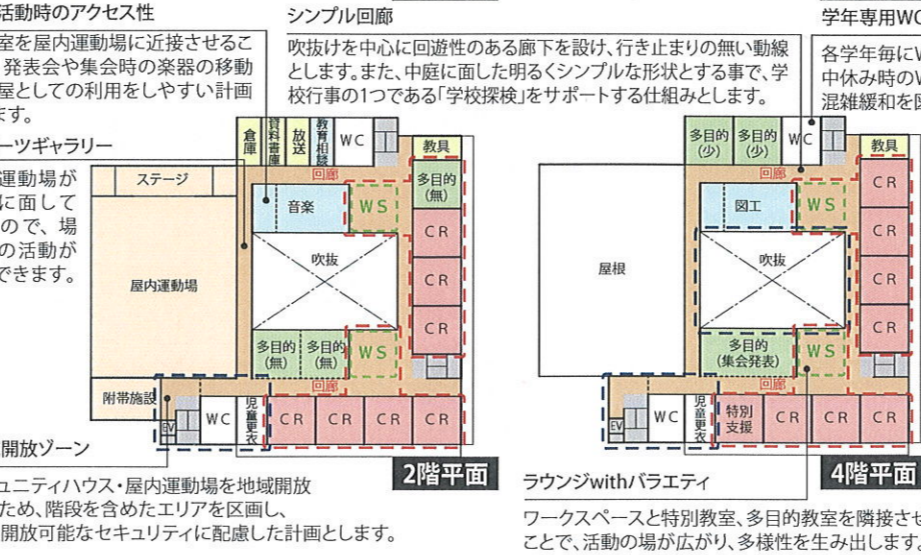
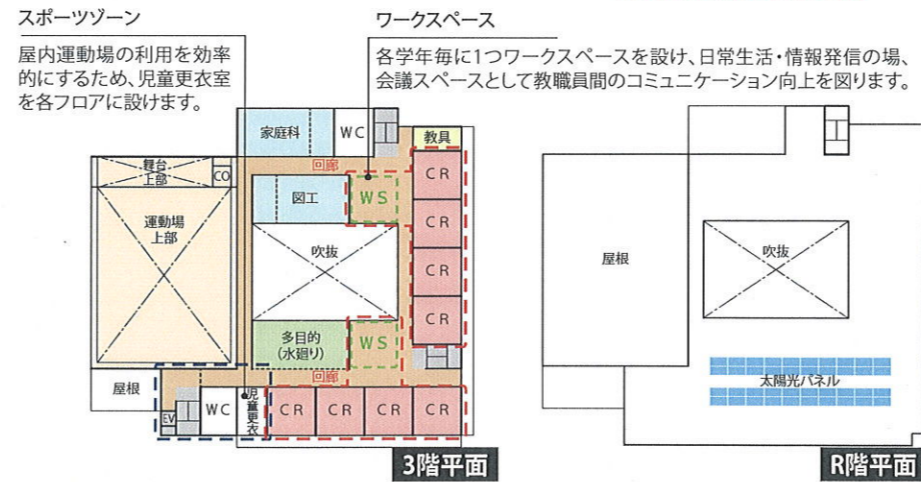
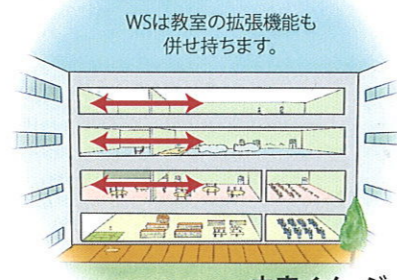
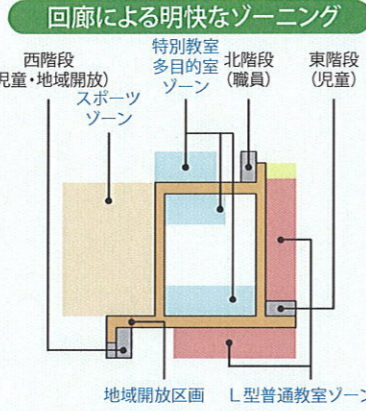
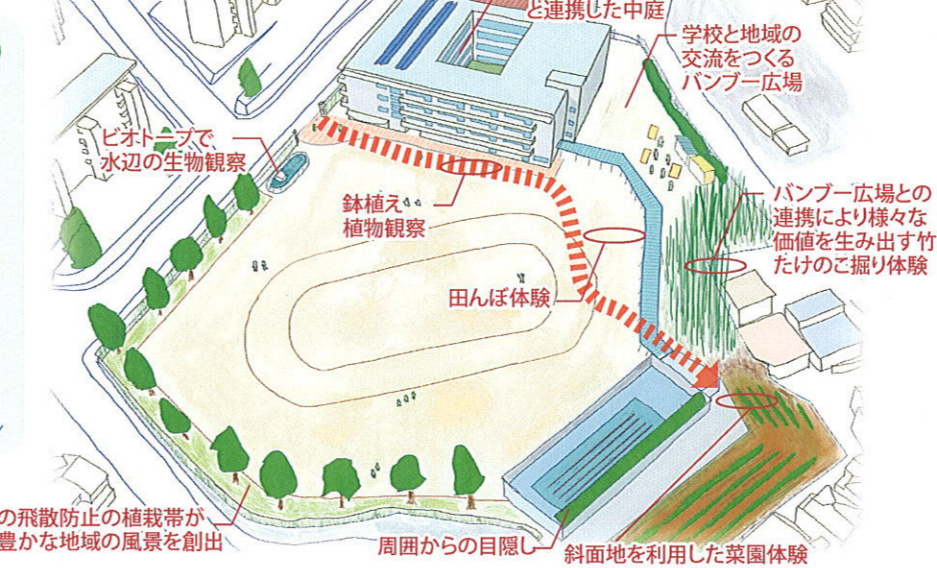


■多様な屋外学習空間が点在する学校

- ・ 既存敷地の利点を最大限に活かし児童が身近に自然とふれあい、学べる『屋外学習空間』を再構築します。(池・植物・田んぼ・竹林・菜園)
・ 自然環境を直に観察・体験することで、各学年における段階毎の学びの体感、地域住民も参加するまちと学校の共存を勝田小の特徴、魅力としてアピールします。

■地域とつながりがある学校

- ・ サブグラウンド：防災訓練、盆踊りのバックスペース活用
・ ピロティ：災害時のトリアージ利用、天候により開催を左右される行事での利用(地域バザー)



(2) 工事中の安全・学校運営への配慮についての提案

■工事中の安全配慮

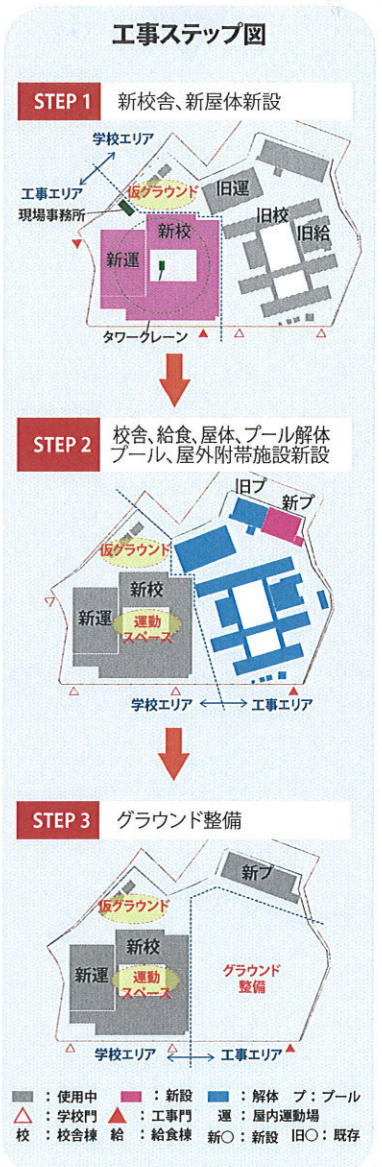
- ・ 既存のプール、運動場の解体とプール新設時期を解体工事に見直すことで工事区分を明確にし、本体工事の負担軽減と工事中の児童への安全性を担保します。
・ 仮囲いと防音パネルを併用し、解体時と新築時の騒音による影響を軽減出来る計画とします。また、仮囲いに透明パネルを部分的に使用して、仮囲い周囲の歩行の安全を図ります。

■工期短縮

- ・ 工事工程を効率的に進めるため、ステップ数を最小限に抑える見直しを行うことで、全体工事の工期短縮を図ります。
・ 既設品や機器の再利用計画を検討します。

■工事中も児童が走れるグラウンドを

- ・ 仮設グラウンドを校舎の北側に計画し、校舎建設後の中庭も仮運動スペースとして使用することで本建替期間中の屋外活動 (体育授業・休憩時間利用) が可能な計画とします。
・ 床をPC版とすることで長寿命化とLCCO2の削減、騒音・工事車両などを軽減する計画とします。



(3) 業務の成果物等の品質確保、業務の進め方と取組体制についての提案

■成果物の品質向上を図るための方法

- ・ フロントローディングの手法を用いて早期に要求性能と課題の抽出及び検証と検討を行い工程の遅延と手戻りを最小限に抑えます。
・ BIMを活用し、基本設計段階から3次元的な検討を行う事で実施設計の作業量を軽減。十分な実施設計の期間と品質を確保します。

■スケジュールの組立てや管理方法などの業務の進め方に対する提案

- ・ 学校建築に精通した管理技術者と担当者が一貫して設計・監理を行う社内体制とします。
・ 作業量を見越した詳細な設計作業フローを作成し、遅延や検討不足が生じないように工程管理をします。

■関係者間の連携をどう行かなどの取組体制についての提案

- ・ 定期的な担当者会議を開催して決定、未決事項を共有し、次の議題を明確化させ問題点の発見と解決を迅速に行える体制とします。
・ 変更や決定事項の伝達ミス、遅れをなくするためのICTツールを利用した電子データのリアルタイム共有体制を構築します。